学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD～灼眼の瞳に映る世界～

ぱっつぁん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ～灼眼の瞳に映る世界～

【Ｎコード】

Ｎ４５４８Ｎ

【作者名】

ぱっつぁん

【あらすじ】

不思議な力を左眼に宿す高校生〈日比野炎雅（ひびのえんが）〉はこれからも普通の暮らしが続くと思っていた。……〈奴ら〉が現れるまでは……

崩された平穏（前書き）

練習に一人称で書いてみました！

ではどうぞ！

崩された平穏

ブゥ、ブゥ、ブゥ…

‘俺’は朝から鳴り響くケータイのバイブ音で目を覚ました。

くそっ、こんな朝っぱらから誰だ、と俺は思いながら完全には起ききっていない体を動かしてケータイを確かめようとした。

バサッ

スタスタ…

ガンッ

「痛ってぇぇぇ！？」

畜生、タンスの角に足ぶつけちまったぞ。

誰だ！こんなとこにタンスなんか置きやがったのは！

って俺しかいねぇな。一人暮らしなんだからな。

とか思いながら俺はようやくケータイの位置にたどり着きケータイを持ち上げる。

パカッ、ポチッ

俺は買ってもう三年近くになる相棒を開きメールの主を確認する。

そこには俺のケータイに唯一登録されている女性の名が表示されていた。

『冴子先輩』

そう、俺が所属している剣道部…と言うわけではなくただ単にと言うか一方的にメアドを押しつけてきた先輩だ。

ちなみに本名は【毒島冴子】さん。巨人で美人の三年生だ。

本音を言えばこんな美人とメアドを交換できて嬉しい。

まぁ、俺の周りにも美人はいるがそいつらはもう相手がいるためNGだ。

とそんなことはさておき俺の眠りを妨げた先輩からのメールを俺は確認した。

『炎雅(えんが)のことだからまた寝坊しているのだろう？早く学校に来いよ？』

と言う内容だった。

ちなみに炎雅と言うのは俺の名前だ。

本名は日比野(ひびの)炎雅(えんが)っつうんだが自分で言うのもなんだがカッコいいだろ？

しかーし、そこで俺はあることに気づきたくもないが気づいてしまった。

現在の時刻が完全に登校時刻を過ぎており授業が始まる時間となっていたのだ。

ちょっと待てよ、おい。確かに目覚ましはかけたはず…まさか！？

俺は最悪の事態を思いベッドの近くに置いてある目覚まし時計を持ち上げる。

ダッダッダッ…

ガシッ

……

まさに最悪の事態だった…

時計の針が動いていない。つまり電池が止まってるってことだ。

「バカヤロォォォォ！！」

ヒュッ

ガシャァン

俺は叫びながら壁に向かって役立たず（目覚まし時計）を投げ飛ばす。

壁に当たった役立たずは見るのも無残になるくらいバラバラに砕け散っていた。

お前のことは忘れないよ……三秒くらい（笑）

とりあえず急いでも遅刻と言う現実からは逃れることは出来そうにないのでゆっくり準備しよう。

スタスタ…

ガチャ

俺は洗面所の小扉から歯ブラシとコップを取り出す。

キュッ

ジャー…

キュッ

水道をひねりコップに水をためる。

ガシガシ…

そして歯ブラシに水をつけたあと歯を磨き始める俺。

三分くらい磨いた俺はうがいをするために再び蛇口をひねる。

キュッ

ジャー…

水が出たことを確認した俺はコップを持ち水を口に含む。

ガラガラガラガラガラ…

「ペッ」

俺は口に含んでいた水を捨てたあと蛇口を閉める。

キュッ

とりあえず歯磨きは終わったから次は制服に着替えるか。

スタスタ…

パサッ

俺はハンガーから制服をとり着替えた。

あとは包帯を巻くだけだな。

えっ？怪我してるのかって？

それは言えないな。なんたって秘密だからな。

俺は鏡の前に置いてある包帯で左目を隠すように巻いていく。

今更ながら俺の髪って変だよなぁ。遺伝だかなんだが知らねぇが俺

の髪は真っ白の純白だ。

俺の親は１３年前の火事のせいで死んだから親の顔はよく覚えてねぇ。

写真も燃えちまったから親と俺が一緒に写ってる写真は一枚もねぇ。

だから親の髪のことなんかわかんねぇし、知りたいとも思ってねぇけどな。

シュルシュル…

キュッ

「よし、完璧だ」

俺は包帯を巻き終えると立ち上がりケータイをポケットに突っ込み家を出る。

ガチャッ

パタンッ

そして泥棒に入られないように鍵を閉める。

鍵を閉めた俺はバイクが置いてある車庫に向かった。

だがそんな俺の目には異様な光景が目に入った。

それは人が人を喰らう様子だった。

「一体…どうなってんだ…」

俺はそう呟くしかなかった。

だってそうだろ。目の前で人間同士が食い合ってんだ。

しかも食われた人間は死んだと思ったら〈奴ら〉みたいになり蘇っている。

悪い夢なら早く覚めろってんだ。

だけど俺はこれが夢じゃないことを知ってる。

だからこそ冷静にものを見極める必要がある。

とりあえず俺は車庫に置いてある木刀を持ちバイクのエンジンをかけた。

ブオォォォン

だが俺がエンジンをかけた途端人を喰ってた〈奴ら〉が俺の方に向かってきた。

ヤバい…

俺は本当の恐怖を覚えていた。

「こんなとこで喰われるか！！」

俺はそう無意識に叫ぶとバイクを走らせ〈奴ら〉をひいていた。
だが罪悪感は微塵もない。
俺が生きるためにやるしかなかったんだ。
「とりあえず学校に行くしかない…」
何故そう思ったかは分からないが俺は学校なら安全だと思ったのだ。
だが俺のそんな希望はたやすく崩れ去った。
「キャア！？こないであ、あ、ギャアアアアアアアッ！？」
「く、来るなバケモノ！？あっ、ガァアアア」
すでに学校には人間を食う〈奴ら〉が何百といたのだ。
どうしてこんなことになったか分からない…
どうして〈奴ら〉が俺たちを食うかは分からない…
だが俺がやることだけは決まっている。
「オォオオオオオオオオオオオッ！！」
生き残るには〈奴ら〉を倒すしかないってことだ。
だったらやってやる。俺は護身用に持ってきていた木刀を片手に〈奴ら〉に向かって走り出した。

つづく……

崩された平穏（後書き）

更新は遅いと思いますが見てくれたら感想ください！

あとアドバイスなどもくれるとうれしいです！

怖いものは怖い！　ｂｙ炎雅

「オォオオオオオオオオオオオッ！！」

俺は突如として現れた〈奴ら〉に向かって木刀を片手に突っ込んで行っている。

我ながら無茶なことをしてるのは百も承知だ。

だけどな生き残るためには逃げるだけじゃだめだ。

いつかは戦わなきゃいけねぇ。

だったら端から逃げるんじゃなく立ち向かえばいいんだ！

そう思った俺は恐怖ですくむ足を動かして〈奴ら〉に接近する。

そして俺は手頃な距離にいる〈奴ら〉の一体に斬りかかった。

「ハァアアアアアッ！！」

俺は〈奴ら〉の一体の肩を思いっきり木刀で斬りつけた。

これなら死なないまでも肩の骨がいかれると思った。

だが〈奴ら〉は俺のそんな希望を寄せ付けないかのように平然と俺に噛みついてきやがった。

「あああああ～」

〈奴ら〉は本当に人間なのかと思わせるほどに口を大きく開け俺に噛みつこうとする。

もしこいつに噛まれたら俺も〈奴ら〉になるのか？

ふざけんな、クソヤロォ。俺はこんなところで死ぬわけにはいかねぇんだ！

「オォオオオオオオオオオオオッ！！」

俺は口を開け俺に噛みつこうとする〈奴ら〉に思いっきり木刀を突き刺した。

木刀は案外あっさり突き刺さっていきそこから赤い液体が吹き出て俺の顔を濡らした。

だが頭を貫かれたこいつは今度は二度と立ち上がることはなかった。

「どういうことだ…。こいつらは頭をやれば死ぬのか？」

俺は血で染まった顔をYシャツで拭いながらそんなことを半信半疑でつぶやく。

だがこんな俺の問いに答えてくれる人物はいるわけがなく変わりに〈奴ら〉が俺に迫ってきていた。

「くそっ、ふざけた世の中になりやがって！！」

俺はそう叫びながら向かってきた〈奴ら〉の頭を斬りつけた。

さっきの節を確かめるためにわざとねらったのだ。
するとやはり俺の節は合っていたらしく俺にやられた〈奴ら〉は動かなくなった。
「そうか…やっぱり頭をやれば…」
ようやく学校に入るための糸口を見つけた俺は血で濡れたYシャツに汗を拭う。
さぁ、反撃の始まりだ！
俺はそう思い足に力をためて思いっきり走り出す。
ペース配分なんて考えてる暇はねぇ！今はひたすら走るんだ！
「ハァアアアアアッ！！」
俺は迫り来る〈奴ら〉を木刀で切り裂きながら進んでいく。
そのたびに〈奴ら〉からは大量の血が俺にかかりただでさえ目つきの悪い俺の容姿をさらに悪くしていった。
俺の白い髪は血で真っ赤に染まりさらに左目の包帯もすでに赤一色だ。
だけどそんなもん構うもんか。生き残れるなら髪なんか知ったこっちゃねぇ！

俺はそう思いながら俺の前に現れる〈奴ら〉を片っ端から倒していく。

あと３０ｍ…２０ｍ…１０ｍ…

だがあと少しと言うところで俺の後ろから叫びが聞こえてきた。

「ひ、ひぃ！？く、来るなバケモノ！？」

逃げ遅れたのか！？助けたいのは山々だが俺だって自分を守るので精一杯なんだ…

俺はそいつを見捨てて学校に駆け込もうとする。

「助けてくれ！！頼む！！助けてよぉ！！」

ザシュッ…

俺はそいつの叫びを聞いて無意識に助けていた。

何でだろうな…。俺だって生きたい。こんな見ず知らずの奴なんかほっといても良かったんだ。

でも……

俺はまだそこまで腐っちゃいねぇ！

「オラァァァアアアアッ！！」

俺はそいつに迫り来る〈奴ら〉を片っ端から切り裂いたあと言った。

「あんた大丈夫か！？怪我してねぇか！！」

俺が〈奴ら〉に意識を向けながら尋ねる。

ドンッ

「えっ？」

だが次の瞬間、俺の背中から衝撃が襲ってきて俺は〈奴ら〉の真ん中へと倒れ込んでしまった。

一体、何が起こったんだ？

俺は何が起こったか把握できないでいると声が聞こえてくる。

「お前バカだな！！でもよぉ助かったぜ！！お前はそいつらに俺のために食われてな！！」

そうか…俺が助けようとした奴が俺を囮にしたのか。

俺がそう思っていると〈奴ら〉が一斉に俺に噛みついてくるのが見えた。

そのときの〈奴ら〉の動きはゆっくりとスローモーションで動くように緩やかに見えた。

あーあ、俺は死ぬのか？

俺はそう思うと無性にこんな世界での未練を感じた。

「まだ……生きてぇな…」

俺がそう呟いたとき周りにいた〈奴ら〉は消し炭になっていた。

だけど俺はそれほど驚いていない。

ただ、また‘左目’の力を使っただけだからな…。

「はぁ…はぁ…。行くぞ…」

俺は立ち上がり再び学校に向かって走る。

どうやら俺の‘左目’は広範囲の〈奴ら〉を消し炭にしてたみたいで学校に入るのはそれほど苦労しなかった。

「はぁ…はぁ……。生きてるのか？」

俺は血で染まった木刀を見つめながらつぶやく。

どうやら俺はまだ生きているらしい。

神はまだ俺に生きろと言っているのか、これからの地獄を見ろと言っているのかは分かんねぇ。

だが残された人生を生き抜くのは当然のことだろ？

「あああああ～」

ちっ、もう来やがったのか。さっき倒したばっかなんだがな。

しゃーねぇ、生きるためには立ち上がるしかねぇんだ！

「邪魔だァァァ！！」

俺は木刀を力強く握ると〈奴ら〉を切り裂いていく。

次から次へとあふれて来やがって…。もう日本は終わっちまったのか？

くそっ、こんな世界に安全な場所なんてのはあるのか？

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ

俺は迫り来る〈奴ら〉を切り裂きながらとりあえず階段を上がっていく。

「あああああ～」

しつこい奴らだ。ん？あれは死体か。死体を粗末に扱うのはあれだが今はなりふり構ってる暇はねぇ。

ドンッ

俺は階段の上に転がってた死体を〈奴ら〉に向かって蹴り転がした。

〈奴ら〉は死体に巻き込まれ階段を落ちていく。

よし、今のうちに安全な場所に行くぞ。

そう思った俺は血で染まった階段を駆け上がっていく。

「はぁ…はぁ……」

ここは大体理科室の辺りか？ちょうど〈奴ら〉もいねぇしどっかに隠れるか。

俺は〈奴ら〉がいないことを好機に隠れる場所を探す。

『キャアアアアアアッ！？』

ッ！？この声は高城の声か！？

まさかあいつまでやられちまったのか！？

俺は隠れている場所を飛び出して高城の悲鳴が聞こえた方に向かって走る。

あいつは頭だけで他は普通の女子校生だ。〈奴ら〉に襲われたら一環の終わりだ…。間に合え！！

俺は無意識に木刀を握る手にさらに力を込めて走る。

どうやら〈奴ら〉は理科室に入ろうとしているようだ。

つーことはあの中に高城がいるってことか！！よし…

タンッ

ザシュッ

俺は走り幅跳びの要領で〈奴ら〉に近づき一気に木刀を振り下ろし一体を倒す。

さらに振り向きざまにまた一体の頭に遠心力をのせた一撃を叩き込む。

あと一体と言うところで〈奴ら〉が理科室に入り込んでしまった。

ザシュッ

だが次の瞬間、中に入ったはずの〈奴ら〉が倒れた。

どういうことだ？ん？頭に刺さってんのは釘か？

そんなことを思いながら俺は理科室に入る。

するとやはりそこには高城と何故かコータがいた。

「ひ、日比野！？」

「炎雅さん！？」

なんだ、こいつらは人をバケモノみたいな目で見やがって。

まぁ、こんな世界になっちまったんなら仕方ねぇよな。

「お前ら大丈夫か？とくにコータ」

「なんでこのデブオタだけなのよ」

あー、なんかツンツン女がキーキー騒いでやがるな。

俺、はっきり言ってこいつに嫌われてんじゃねぇかな。

「騒ぐな、騒ぐな。大丈夫なのか高城」

「ふん、私は天才なのよ？これくらいへっちゃらよ」

と何故か威張り始める高城…。

ったく聞いたら聞いたでこれだ。だったら最初っから言わせんなっつうの。

まぁ、無事だっただけでも収穫か。

「ところであんた。あんまり近寄らないでくれる？」

おいおい、再会してからいきなりこの有様？炎雅さん傷つくんですけど…。

「なんでだ、つうか助けてやったんだから少しは感謝しろ」

「あんた自分の格好鏡で見たら？」

あぁ？俺の格好？そんなに……そう言うことか。血だらけってことなんだな。

「悪かったな天才さんよ」

俺は意地悪く高城に言うととりあえず頭を洗うために水道に頭を突っ込む。

キュッ

ジャー

バシャバシャバシャバシャ…

キュッ

ブンブン

「きゃっ！？ちょっとあんた、アタシに水飛ばさないでくれる？」

はぁ…。いちいち細かすぎる。さっきまであんなに命がけの殺し合いやってたのにもうこんな雰囲気かよ…

まぁ、俺には関係ぇねぇからどうでもいいがな。

「じゃあお前らは好きに頑張れよ？」

そういって俺は理科室を出ようとするが何故かコータに腕を掴まれる。

正直、暑苦しいからやめて欲しい。

「なんだコータ。俺はもう行くんだ。離せ」

「あの…一緒に行きませんか？炎雅さん。人が多い方が助かる確率は高くなるでしょ」

確かにお前の言い分はただしいかもしれねぇな。だけど…

「離せ」

俺の決意はもう固まっている。もう誰も信じない。

さっきみぇなことがまたあったらかなわねぇからな。

「迷惑なんだ。俺はもう誰も信じない」

俺は殺気と言うのだろうか？そう言うのをコータに向ける。

するとコータはようやく俺の手を離し自由になれた。

さぁて、さっさと『待ちなさいよ！』…今度は高城か…

「なんだ」

俺はコータにやったように高城にもやる。

だが高城は全く動じることはなく俺の目をじっと見つめて来やがる。

やめてくれ惚れちまう…。

まぁ、冗談だがな

「アンタもアタシ達と一緒に来なさいよ」

こいつは俺の話を聞いてなかったのか？

「さっきも言ったろ。俺は一人でいく。もう誰も信じねぇ」

「そうやってまた一匹狼気取り？笑わせないでよ」

また、ってなんだ。俺がいつ一匹狼なんか気取ったよ。

「キーキーうるせぇんだ。その口ふさげよ」

「ふさがないわ！なんでアンタはアタシ達を信じないの！？」

ったく、俺だってお前等を信じてぇよ。だがさっきのことがあった後じゃ信じらんねぇな。

チリリリリ…

あぁ？これは火災警報か。なんか他でもあったみてぇだな。

仕方ねぇ、見捨てるわけにもいかねぇしな…

「俺を一緒にいかせてぇなら武器を持て。素手じゃ話になんねぇ」

はぁ…いかせてぇならって、どんだけ図々しいんだ俺…

俺が言うと素早く高城とコータが準備始めやがった。

そして準備を終えると俺と高城とコータは理科室を出た

つづく……

怖いものは怖い！　ｂｙ炎雅（後書き）

感想待ってます！

ようやく出会えたか　ｂｙ炎雅（前書き）

なんだかシリアスな感じが書けない…

と言うことで三話目です！

ではどうぞ！

ようやく出会えたか　ｂｙ炎雅

俺は理科室で高城とコータと合流して〈奴ら〉を倒しながら進んでいる。

まぁ、倒してるっつっても俺がほとんどの頭をぶっ飛ばしてコータが残ったのを撃ち殺してるだけだ。

案の定、高城は何もせずにただ高みの見物をしてるだけだ。

とりあえず思った通りだな。にしてもコータの射撃術には驚いた。

どこで訓練すれば強くなれんだか。まっ興味ねぇけどな。

「後ろに気をつけろよ、特に高城」

「分かってるわよ、そんなこと！」

ホントに分かってんのか？

ヒュッ

ザシュッ

後ろに〈奴ら〉がいたってのによ。はぁ…、先が思いやられる。

「ちょっ！？危ないじゃないのよ！？バカッ！！」

はぁ…、助けてやったってのになんなんだその物言いは。

少しは感謝しろってーの。

ズシュッ

と言いたいが言ったら言ったで後から面倒なので無言で木刀を抜く俺。

すると何やら高城が文句を言い始めたがそれも無視。

相手にしてたら時間がいくらあっても足りやしねぇ。

「なぁコータ。弾だかなんだか分かんねぇが足りるか？」

「まぁ、今のとこは大丈夫かな。それよりこれは…ペラペラペラペラ…」

あー。また始まったよ。コータの解説がよ…。これも高城の文句と同じで時間がいくらあっても足りやしねぇ。

めんどくせぇ奴らと行動することになっちまったもんだ。

どうせなら先輩とがよかった。

「はぁ…」

「何ため息ついてんのよ」

「いーや。別に、何でもねぇよ」

何でもなくねぇんだが言ったら言ったで後から面倒だろ？
ってさっきも言った気がするがまぁ、いいや。
「ちょっと止まって二人とも」
あぁ？今度は何しでかす気だ？つーか雑巾拾って何してんだ。
ヒュッ
ベチャ
なんと高城は雑巾を〈奴ら〉の頭に投げつけやがった。
何面倒増やしてんだバカヤロォ！！ってあれ？気づいてないのか〈奴ら〉はそのまま歩いてくぞ？
どういうことだ…。
「何…するんですか？」
ナイスだ、コータ。俺もそれが聞きたかった。
「いいから黙ってなさい」
相変わらずの自称天才ぶりだな。お前だけ理解しようとしてんのか？
ヒュッ
ベチャ

なんだ今度は近くの壁にってあぁ？〈奴ら〉が雑巾が当たったとこに向かってくぞ。

どういう事だ？自分に当たったのは気づかねぇくせに壁など当たったのは気付くんだ？

「分かったでしょ？」

一体何がだ？お前が自称天才ってことか？

と思ったが例のごとく口にはしない。

「自分の体にものが当たっても反応しない。痛覚は死んでるのよ。音には反応してる。おそらく視覚もないわ。でなけりゃロッカーにぶつかるわけがない」

ほぉ、中々やるな。つーかなんで勝ち誇った目で俺を見るんだ？

なんだ、ほめてもらいたいのか？

「熱とかは…」

なんでコータが言うとそんな不機嫌面になるんだ？

「そのうち嫌になるほど試せるわよ。行くわよ」

「ちょい待て。嫌になるほど試せるって気付かれたらどうすんだ」

「そのときはあんた達でなんとかしなさい」

……こいついつか絞める。つーかいっそのこと今絞めてやろうか？

今、絞める　↑ピッ
後にする

よし、今絞めるか。

とりあえずチョークスリーパーで。

スタスタ

ガシッ

「おいこらこっちとら命がけで殺し合いしてんだ。自由に試せると思うな」

「ちょっ、ちょっと何すんのよ！？」

あの自称天才の高城が笑わせるな。腕力勝負になったら形無しだな。

あっ、ヤベ気づかれた。

「すまん気づかれた」

「すまんじゃないわよ！！何やってるのよ！？」

ホントに面目ない。なんだかんだ言って知り合いに会えから気がゆるんだんだな。

仕方ねぇ、今回は完全に俺が悪かったわけだしな。

「〈奴ら〉は俺が引きつける。だからお前等は先に行け」

「えっ！？でも炎雅さん…」

ったく心配性だなコータは。

「お前は高城を守ってやれ。いいな」

「……はい！！」

うし、いい返事だ。高城はなんか言いたそうな顔してるがまぁ、いい。

そんじゃま気も抜けてるし引き締めるか。

「ハァアアアアッ！！」

ザシュッ

俺はとりあえず近くにいた〈奴ら〉を斬る。

ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ

そして連続で〈奴ら〉を切り裂いていく。

だが俺はそこで反対方向からも〈奴ら〉が来ていることに気づいた。

しかも俺がいる方向にはかなりの数がいて反対側を相手にする暇は

ねぇ。

くっ、‘左目’を使うべきか…。だが今は高城とコータがいる…。どうすれば…

「炎雅さん、弾が切れます！時間を稼いでください！」

ちっ、絶体絶命か。

「分かった。任せろ」

仕方ねぇ、‘左目’を使うか。

俺は左目に巻いてある包帯を剥ぎ取った。

side　高城

一体どうすんのよ！？日比野がアタシに変なことしたせいで〈奴ら〉が寄ってきたじゃない！？

て言うか日比野ってあんなに強かったの！？

デブオタも何気なく強いしこれじゃアタシだけが足手まといじゃない！！

「炎雅さん、弾が切れます！時間を稼いでください！」

えっ！？どうすんのよ！？後ろからも来てんのよ！？

「分かった。任せろ」

ってアンタも軽々しく受けてんじゃないわよ！！

って包帯取ってる？左目って見えないんじゃなかったの？しかもなんか左目だけ赤い？

「高城さん！！後ろに来てます！！」

「えっ？」

アタシが振り向くとデブオタが言ったとおり〈奴ら〉がいた。

しかもアタシに噛みつこうとしている…。

「キャアアアアアアアアアッ！？」

アタシ、ここで死んじゃうのかな…

〈奴ら〉はアタシに食らいつこうと口を開いている…

「高城、伏せろ」

アタシは後ろから聞こえてきた日比野の声にとっさに反応して伏せた。

すると炎を纏わせた木刀を持った日比野が〈奴ら〉を切り裂いていた…

side　炎雅

あーあ、使っちまったよ。左目の力…。

「高城、危ねぇから伏せてな」

「ひ、日比野…それ何？」

高城はやっぱり俺の木刀を指差しながら言ってくる。

今までバレないで来たのにな…。まぁ、人の命にはかえらんねぇからな。

「後で話すよ。今はこいつらをなんとかしねぇとな。コータ！！」

「は、はい！！」

「高城を頼んだぞ」

俺はコータに告げると残りの〈奴ら〉を倒すために接近する。

そして炎を纏わせた木刀で一体を切り裂く。

「炎雅さん、後ろです！！」

サンキュー、コータ！！

俺は振り向きざまに〈奴ら〉に俺の左目を向ける。

すると〈奴ら〉の体は一気に発火して消し炭になる。

久しぶりだな、この技を使うのは。

まぁ、いいや。とりあえず高城とコータにあとで説明しとくか。

バタバタバタバタ…

ふぅ、どうやら他の生き残りも来たみたいだな。

とりあえず炎を消して焦げた木刀は捨てとくか。

「小室、麗、先輩！！！こいつらは任せる！」

「あぁ！！」

「任せて！！」

「炎雅は二人を！！」

まぁ、とりあえず強力な助っ人だな。さっきの高城の叫びで気づいたのか。

だけどそのせいで敵が増えたのも事実だ。

つーことでやることは決まったな。

俺は近くのロッカーからモップを取り出した。

「コータ、もう一回言うが高城は任せたぞ」

「は、はい！！」

よし、んじゃ先輩の手助けと行きますか！！

「冴子先輩！手助けします！」

「遅刻だな、炎雅」

それは言わないでください…。

とりあえず腹いせに一体の頭をつぶす。

先輩も相変わらずの鋭い剣筋で〈奴ら〉を倒していく。

ヤベェ、惚れちまう…なぁんて言う冗談を行ってる場合じゃねぇな。

「先輩！！俺の後ろに！！」

こんな世界になっちまったんだ。

俺の‘左目’の秘密がバレようがバレまいがもうどうでもいいんだ。

「小室、宮本、コータ、みんな伏せろォォォ！！」

俺が有らん限りの声で叫ぶとみんな伏せてくれた。

そして俺は左目から血の涙を流しながら左目の力を使う。

「火炎砲（ブラスト）！！」

そう叫び俺は〈奴ら〉に手を向ける。

別に手から放出される分けではないが照準を決めるなら手の方が便利だ。

俺の手を銃口代わりにしたなら俺の手から放たれた炎の塊は銃弾ってとこだな。

まぁとりあえず俺の‘左目’の力で炎の塊を〈奴ら〉に飛ばして〈奴ら〉をすべて消し炭にしたわけだ。

「え、炎雅…今のは…」

やっぱり驚いてるな。先輩だけじゃなくてみんなだけどな。

まっ、こんなバケモノみてぇな力使われたらこうなるわな。

「話は後だ。今はひとまず職員室だ」

小室が俺の気持ちを代弁してくれたかのように言った。

ナイスだ、小室。

そして俺たちは小室の言葉に頷き職員室に向かった。

つづく…

ようやく出会えたか　ｂｙ炎雅（後書き）

感想待ってます！

便利なものなら最初から使いなさい！　ｂｙ高城（前書き）

やっちまった気がする…

便利なものなら最初から使いなさい！　ｂｙ高城

只今現在進行形で俺は高城と宮本に縄で縛られ椅子に座らせられている。

まぁ、それだけなら別に大したことはないのだが、先輩が持っていた木刀の切っ先を俺の喉元に近づけている。

と言うか食い込んでるんですけど…

「ねぇ、日々野。さっきのは一体なんなのかしら？木刀に炎を纏わせたり炎の塊を出したりしてアンタはバケモノ？」

バケモノ…ねぇ。まぁその表現もあながち間違ってはいねぇな。

こんな力使えんのなんて俺以外にいるわけがねぇからな。

「バケモノだったらどうすんだ。俺を殺すのか？」

俺は意地悪い笑みを浮かべながら高城に言う。

「別に。知り合い殺したって後味が悪いでしょ。そ、それに助けてもらったし…その…」

「あぁん？何言ったか最後の方わかんねぇんだけど？」

俺はふんぞり返りながら高城に言う。

つうかなんか高城顔赤ぇんだけど？風邪でもひいたか？

嫌、違ぇな〈奴ら〉の血がついてるだけだった。
俺がそんなことを思っていると高城が俺のすねを蹴りながら「知らない！！」とか言って顔洗いに行ってしまった。
一体なんなんだ…
「炎雅、さっきの質問をもう一度する。君の力は一体なんなんだ？」
やっぱり言わなきゃだめか。高城ならなんとかあしらえるが先輩はだめだな。
「はぁ…」
俺は一回ため息をついた後、左眼，の力を使って縄を焼き切った。
「ッ！？それも炎雅の力なのか？」
案の定、先輩は俺が縄を焼き切ったことに驚いている。
「あぁ、そうですよ。俺の、左眼，の力ですよ」
俺は真っ赤に染まりあがった深紅の左眼を指差しながら先輩に言う。
「君の、左眼，は見えないのだと思っていたがそうではないのだな？」
「はい。俺の、左眼，はちゃんと見えてますよ。ただ包帯かなんかして隠しとかないといつ力が暴走するから分かりませんからね」

「力が暴走？」

やっぱり俺の言葉に先輩は不思議がっている。

実際俺も力が暴走したわけじゃないしするかもわかんねぇ。

だけどとりあえず、もしも、の時の話もしとかねぇとな。

「そうっスよ。力が暴走したら俺の、左眼、…、灼眼、がみんなを殺すことになる。だから俺はこの、灼眼、を使いたくないんです」

灼眼っつうのは俺が適当につけたこの魔眼の名前だ。

名前はないよりあったほうがいいだろ？

「なるほどな。しかし一つ腑に落ちないことがある。どうして君はその灼眼…だったか？それを使ったときに目から血を流していたのだ？」

さすが先輩だ。細かいところまで見逃さねぇや。

「俺の、灼眼、は使用制限があるかどうかわかんねぇッスけど使うと目に激痛が走るンスよ」

まぁ、あんまり強い力をつかわねぇなら結構持つけどな。

「多分使い続ければ失明でもするんじゃないッスか？」

俺が言うと先輩や宮本、他の連中も驚いている。

そんなに驚くことか？

「と言うことは炎雅の灼眼に頼るわけにはいかないのか…」

今なんとおっしゃりましたか冴子先輩！？

俺に頼る！？ヤベェ超嬉しい。

「大丈夫ッスよ。先輩のことは俺が守りますよ」

「むっ、そ、そうか。ありがとう…」

先輩…ヤベェマジで嬉しいんだけど…。

だけどさっきの高城と同じみたいに顔赤いけどどうしたんだ？

ｓｉｄｅ　冴子

なるほど炎雅の左眼にはそんな力があったのか…。

前々から思っていたが炎雅は強いな。

剣道をやっていたわけでもないのに私と引き分けるほどの実力者だ。

今までこれほど頼りになる人物はいなかったな。

「多分使い続ければ失明でもするんじゃないッスか？」

私は炎雅の言葉に驚いてしまった。

確かにあそこまで便利な左眼だ。
デメリットがあってもおかしくはないがまさか失明とは…。
「と言うことは炎雅の灼眼に頼るわけにはいかないのか」
私が言うと何故か炎雅はうれしそうな顔をしていた。
一体どうしたと言うんだ？
「大丈夫ッスよ。先輩のことは俺が守りますよ」
わ、私を守る！？男の子にそんなことを言われたのは初めてだ…。
一体私はどうしたと言うんだ…。
さっきから鼓動が速くなってきているが気のせいなのだろうか？
「むっ、そ、そうか。ありがとう…」
絶対に顔が赤くなっているな…。
ホントにどうしたと言うのだ。
こんな感情初めてだ…
ｓｉｄｅ　炎雅
とりあえず俺の左眼の‘一部’の説明を終えた俺は先輩が俺の頭を

見ていることに気づいた。
そんなに俺の白髪が珍しいのか？いつも見てるはずなのに。
「なぁ、炎雅。君は髪の色を染めたのか？」
はぁ？何を言っているんだこの先輩は。
俺はこの白髪意外に気に入ってるって前に言ったはずなんだけどな。
「髪の色なんか染めてねぇっスよ」
「そうなのか。じゃあ君のその赤毛は〈奴ら〉の血、と言うわけか」
「えっ？まだついてますか？」
おかしいな。さっき洗ったはずなんだけどな。
仕方ない、もう一回洗うか。
そう思った俺は確かついているはずの職員室の洗い場に向かった。
だがそこには頭にタオルをかぶりなんだか驚いてる顔をしたコータがいた。
今は確か高城が洗い場を使ってるはずだよな。
一体何があったんだ。
「おい、コータどうした…ん……だ…」

おいおい、なんだよこれ。嘘だろ…。

た、高城が…高城がメガネをかけてやがる。

しかも言いたくはないがかなりの美人に見えるぞ。

「お前、本当に高城か？身代わりか瓜二つのそっくりさんか？それともドッペルゲンガーか！？」

「……どういう意味よ」

なんか高城が不機嫌になっちまったが別に似合わねぇってわけじゃねぇ。

むしろかなり俺好みになってやがる…。

「いや、あんまりにも可愛いからよ…。つい見取れちまったんだ…」

あっ、つい恥ずかしいことを口走ってしまった。

うむ、言ってしまったもんは仕方ねぇな。

「ふ、ふん。いまさらそんなこと言って機嫌取りしたって遅いんだから！！」

高城はそう言うと洗い場を出てってしまった。

機嫌取りとかじゃなくてマジで言ったんだけどな。

「なぁコータ……。メガネいいな…」

「はい…。メガネ…いいです…」

ここに俺とコータの高城メガネ同盟が結成された（笑）

まぁ、とりあえず高城メガネ同盟が結ばれたのは置いといて頭を洗うか。

さすがに血だらけってのは気持ちがよくねぇからな。

キュッ

バシャバシャバシャバシャ…

キュッ

ブンブン…

そう言やタオル持ってなかったな。

ん？あれはメガネ高城が使ったタオルか。

……使ってもいいよな……。

俺はメガネ高城が使ったタオルを使うことにした。

先に言っとくが下心などはない。…本当だからな。

つーことで俺は濡れた頭を拭くためにメガネ高城が使ったタオルを

使っ…んん！？

こ、これはメガネ高城の匂いか！？い、いや待て。これ以上はやっちゃいけねぇような気がする…。

勿体なかったが俺は頭を息を止めながら拭きみんなの元へ戻ったのだがみんなの様子がおかしかった。

なにやらテレビを見て固まってやがる。

『あぁぁ！？助けて！？ギャ、ぎゃあああぁぁぁ…ぁぁ…ぁぁぁ…ぁ…ザーーー…』

……

どぉやら、被害は思ったよりも拡大してるみてぇだな。

こんな腐った世界に本当に…本当に安全な場所なんかあるのか。

『な、何か問題が起きたようです。ここからはスタジオからお送りいたします。どうやら屋外は大変危険な状態になっているようです』

屋外だけじゃねぇ。中も外も、いや日本やもう世界にまでこの現象が起こってるんだ。

〈奴ら〉が人間を喰らいそして喰われた人間は〈奴ら〉になる。

この連鎖が続いているんだ。

ドンッ

「どうして…どうしてそれだけなんだよ」

小室が机を殴りつけながら言っている。

そんなん俺だって同じさ。

「パニックをおそれてるのよ。恐怖は混乱を招き、混乱は秩序を乱すわ」

「最もなことを言うな高城。まぁ、お前が言いたいことは秩序が崩れたらどうやって〈奴ら〉と戦うのかってことだろ」

「日比野の言うとおりよ」

秩序がどうのこうの前にどうやって戦うんだ。

俺の灼眼はずっと使えるわけじゃねぇし人間には体力の限界があるんだ…。

「くそっ！！」

俺はそこまで考えると机を思いっきり殴りつけた。

そんな間にもニュースでは世界にも〈奴ら〉が現れたことを放送している…。

最悪だ。いくらこんなバケモノみてぇな眼を持っててもなんの役にもたたねぇじゃねぇか。

「信じられない…。たった数時間でこんなになるなんて…」
宮本はそういうが俺も、いや、ここにいるみんな同じ意見だろうよ。
「絶対に安全な場所あるわよね？すぐいつもどおりに『なるわけないし』」
「そんな言い方することねぇだろ」
「いーや、小室。高城の言うとおりだ。こんなパンデミックになっちまっんだ。いつもどおりの日常にすぐ戻るとは思えねぇな」
俺が八つ当たりをするように小室に言うと小室は俺の胸ぐらを掴んできた。
「だからそんな言い方『うるせぇ』ッ！？」
ガッ
「グッ！？」
ガチァァァン
俺はこんな世界になっちまったのに未だに夢見るこのバカ（小室）を殴りつけた。
小室は職員机を盛大に倒して転んだ。
「孝！？日比野くん、なんてことするのよ！！」

宮本は俺に殴られて倒れている小室に駆け寄りながら俺に言う。

「いい加減現実を認めろ。俺だって信じたくはないさ。だけどな今、世界中で同じ現象が、俺たちの目の前であんな現象起きてんだぞ！！しかも〈奴ら〉は減ることを知らない。永遠に増え続けるんだ！！」

俺は腹の中の言葉をすべて小室に、宮本にぶつけていた。

こいつらのせいじゃないのに俺は…

俺はこの空間に耐えきれずに職員室を飛び出した。

ｓｉｄｅ　孝

炎雅に殴りつけられた僕は今、麗に手当をしてもらっている。

確かに炎雅も不思議な力を持ってるけど人間なんだ。

こんな世界になってイライラがたまってたんだろう。

「孝、大丈夫？」

「あぁ、問題ないさ。〈奴ら〉との戦いに比べたらな」

僕はそんなことを思いながら立ち上がる。

確かに炎雅の言うことも一理ある。

いい加減、炎雅の言うとおり現実を認めるしかないみたいだな。

ｓｉｄｅ　高城

あんな感情的になる日比野はアタシは見たことがない。

アタシが知ってる炎雅はいつもヘラヘラしててアタシをバカにしてくる炎雅。

だけどアタシが困ってるときや悩んでるときはいっつも側にいてくれた炎雅。

でもさっきの炎雅はアタシが知ってる炎雅じゃない…。

アタシはあいつのことをどこまで知ってるの？

ｓｉｄｅ　炎雅

あーあ、やっちまったよ。

本当はあんなこと言うつもりなかったんだけどなぁ…。

あぁぁ！！むしゃくしゃする！！

こうなったら片っ端から燃やし尽くしてやる。

ついでに俺の灼眼の限界を試してやるよ。

そう思った俺は学校を飛び出し〈奴ら〉の元へと走っていった。

つづく……

便利なものなら最初から使いなさい！　ｂｙ高城（後書き）

感想待ってます…

力を過信するのは禁物だぞ　ｂｙ冴子（前書き）

死亡フラグを炎雅は回避できるのか！？

ではどうぞ！

力を過信するのは禁物だぞ　ｂｙ冴子

こんにちわ、みなさん。日比野炎雅です。

只今俺は勢いで学校を飛び出して八つ当たりで〈奴ら〉を消し炭にしようと思ったのだが学校を出た俺は絶句してしまった。

俺が来たときも〈奴ら〉は結構いたが今ほどではなかった。

今の数はざっと数えて数百体はいるぞ。

しかも俺は勢いよく飛び出したせいで〈奴ら〉は俺の存在に気づいてこっちに向かってきてやがる。

……もしかして死亡フラグが立っちまったか…。

「あああ〜」

ちっ、もう後ろからも来たっつうか囲まれてんじゃねぇか。

やべぇな、こんな数に俺の灼眼は通用すんのか？

使ったことがあるって言ってもたかだか数体の〈奴ら〉を燃やしただけだ。

使い方は分かるがホントに大技があるのか？

とりあえず近くに来た奴を消し炭にするか。

「火炎弾（ブレイズ）」

俺は一番近くに来た〈奴ら〉に手を向け炎の塊を放つ。

炎の塊を受けた〈奴ら〉は一瞬で消し炭になる。

「よし、これなら行けそうだ。だったら次は……。『火炎放射今命名（ヘルズバーナー）』！！！」

俺は手から炎を放射するように念じながら灼眼を使う。

ちなみに技名に関して厨二病とかは言わないでくれ。

自分でも分かってるからな。

そして俺がヘルズバーナーを使ってみると本当に出てきやがった。

とりあえず俺の周りにいた半径１０メートル以内の奴は消し炭になった。

「へっ、意外に使い勝手がいいじゃねぇか」

まっ、灼眼から血流れてきてるが今のとこは大丈夫だ。……多分。

「あああ～」

って考えてる暇もねぇみてぇだな。

「だったら次はこれだ。『炎剣今命名（ヘルズブレード）』」

俺は手から炎の剣が現れるように灼眼で念じた。
すると案の定、俺の手にヘルズブレードが現れた。
二回目だが名前に関しては何も言わないでくれ。
「オォオオオオオッ」
俺はとりあえずヘルズブレードの威力を確かめるべく一体を斬りつけた。
すると俺に斬られた〈奴ら〉はまたもや一瞬で消し炭になりやがった。
もしかして俺って最強？とか思ってるとさらに死亡フラグが増えそうな気がする気がするのでそんな邪念はすてる。
「あああああ～」
「ブレイズ！」
俺は後ろから来た〈奴ら〉を一気に焼き払う。
だがまだまだいる〈奴ら〉の群れの中の一握りも行かない位の数を倒したからって気は抜けないな。
そう思った俺はヘルズブレードを消して一気に〈奴ら〉を焼き払うために大技を使おうと灼眼の力を一気に使う。
「ハァアアアア……。『魔火炎今命名（デス・ブレイズ）』！！！」

俺は灼眼の力をフルに使ってここら一帯の〈奴ら〉を焼き払おうとする。

右手を上から下に思いっきり振り下ろし灼眼の力を一気に解き放つと少なくともグラウンドの半分は埋め尽くすような炎が現れた。

しかも威力は俺が使ってきた厨二病全開の技とは違い塵も残さないほどの威力だ。

さらに射程範囲がかなり広いからかなりの〈奴ら〉を消すことに成功した。

「す、すごうっ！？痛ぇ、くそ、なんだこれ！？」

畜生、調子に乗って使いすぎたか…。

ヤバい痛すぎて動けねぇ…。

「あああぁ〜」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい…

こんなとこで死ぬわけには行かないのに…。

カーーーン…

一体何の音だ。確かに学校の中から聞こえてきたぞ。

だがこれで〈奴ら〉の意識は俺から学校の中に移ったみてぇだな…。
とりあえず助かったが一体誰が…
「大丈夫か、炎雅！！走るぞ！！」
と思った俺の元には小室が駆け寄ってきた。
「小室……。走るってどこに」
「大丈夫だ、僕についてこい！！」
俺は小室の言葉に無言で頷き灼眼の使いすぎでまともに動かない足に鞭を打って立ち上がり走り出す。
あんだけ消し炭にしたってのにもうすでに〈奴ら〉は集まってきていた。
だが小室や先輩、宮本にコータの攻撃により俺たちは走ることができている。
だが順調にみえたのもつかの間、先輩たちについてきていた一人が〈奴ら〉に噛まれそうになってやがる。
仕方ねぇ、助けてやるか。
「火炎弾（ブレイズ）！！」
俺はすでに使いすぎで激痛が走る灼眼をさらに使いそいつを助けた。

「大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です」

「そうか。なら早くあいつらについていけ。後ろは俺に任せろ」

俺が言うとそいつは俺の灼眼のことも聞かずに走り去っていった。

「炎雅！！急いで！！」

俺が立ち止まってるのを見たのか高城が俺のことを待っていてくれた。

「つーか、いつから俺を名前で呼ぶようになったんだ？」

「ッ！？そ、そんなことは今はどうでもいいでしょ！！」

まぁ、確かにそうかもな。

そんなことを思いながら俺は高城について行くとその先にはバスがあった。

どうやらバスに乗って学校を脱出するらしい。

「高城は先に乗れ。俺は近寄る〈奴ら〉を消し炭にする」

まぁ、もう今日は使えるか分かんないけどな。

「分かったわ。噛まれないように気をつけなさい」

「あぁ」

俺が高城に言うと高城はバスに乗った。

ついでに俺と同じ目的で外に立ったのか小室と先輩が俺の脇にきた。

「小室くん、炎雅。みんな乗った！」

「先輩が先に」

「いや、二人は先に乗れ。ここは俺が引き受ける」

俺が言うとバスのエンジンが始動した。

それと同時に俺たちはバスに乗り込んだのだがなにやら声が聞こえてくる。

「誰だ？」

「あいつは確か…」

俺はあいつ、いやあの糞に見覚えがあった。

「三年A組の紫藤だな」

やっぱりな。こいつには色々と世話になったからな。

ん？宮本の表情が変だな。どうしたんだ。

「行けるわよ！」

おっ、そういや鞠川先生もいたな。忘れてたぜ。

「もう少し待ってください！」

ガンッ、ガンッ

「前にも集まってる、集まりすぎると動けなくなる…」

鞠川先生の言うとおりだな。

だがあんな糞はどうでもいいがあの後ろのあいつらは助けねぇとな。

「踏み潰せばいいじゃないッスか！！」

「この車じゃ、そんなことやったら横倒しよ！！」

確かにメガネ高城の言うとおりだな。

「大丈夫だ。俺がなんとかする、だからたすけるぞ」

俺が言うと小室は無言で頷きあいつらを助けに向かおうとしたが宮本に止められてしまう。

「あんな奴助けることない」

「ッ、なんだってんだよ」

小室は宮本の腕を振りほどき叫んでいる。

だがその間に俺はバスを降りてあいつらを助けに向かった。

「お前ら、早く乗りな」

俺はあいつらをの元に寄りながら言う。

するとクズが俺を見ながら言ってくる。

「ではお先に失礼しますよ」

「あぁん？誰がお前なんか乗せるって言ったよ」

俺はクズの肩を掴みながら言う。

あー、汚ぇ汚ぇ。

「と言いてぇがここは行かせてやるよ。だがな覚えてろよ、クソヤロォ」

俺はそう言うとクズの肩から手を離すとそこに誰かが転んできやがった。

「紫藤先生！足首を挫きました！」

「おや、そうですか。ではここまでですね」

クズはそう言ってこいつを蹴りつけようとしやがった。

だが俺はその前にこのクズを殴り飛ばす。

「済まねぇな。手が滑っちまったよ、紫藤先生」

「くっ、覚えておきなさい」

クズはお約束通りのセリフを吐きながらバスに乗り込む。

「お前も早くいけ」

「で、でも足首が…」

ちっ、めんどくせぇ。

俺はこいつを背負うとバスに向かって走り出した。

正直キツいんだがな。

「小室、こいつを頼む」

「炎雅はどうするんだ！？」

「俺か？俺はお前らが逃げれるように道を作る。だから先に行け。後から追いつくから」

俺はそう言うとバスから離れ近づいてくる〈奴ら〉に手を向ける。

「火炎放射（ヘルズバーナー）」

俺はヘルズバーナーを使いバスに群がる〈奴ら〉を一気に焼き払う。

そして俺は鞠川先生に叫んだ。

「鞠川先生！！バスを出してください！！」

『で、でも』

こんなとこで時間をつぶしてる場合じゃねぇだろ。

「いいから早く行け！！」

俺が叫ぶと鞠川先生は泣きそうな顔になりながらバスを走らせる。

俺はバスが簡単に抜けられるようにヘルズバーナーを使いバスの進行先の〈奴ら〉を焼き払った。

「ふぅ…」

あとは、俺も逃げるだけなんだがその前に…

「俺の周りに群がるこいつらをなんとかしねぇとな」

バスが去った後で気づいたが俺の周りには〈奴ら〉が群がってやがる。

しかもかなりの数で隙を狙って逃げるのも無理そうだな。

ついでに言えばもう灼眼も限界なんだがな…

「へっ……。ここで俺も終わりか…。でもただで終わる気はねぇ。お前らを道連れにしてやるよ！！」

俺はこんな状況の中笑みをこぼしてるのも自分で分かるくらいの笑みを浮かべて灼眼を使う。

なんで笑みがこぼれたかは分かんないけどな。

あーあ、小室に謝れなかったな…。

結局、先輩とは引き分けのままか…。

宮本とは結構話があったんだけどな…

コータとはまだまだ銃やメガネ高城について語ろうと思ってたんだけどな…。

鞠川先生には結構世話になったっけな…

高城のデレが見れないのが一番残念だったな…

今更言っても仕方ねぇか…。

「オォオオオオオオオオオオオオオッ！！」

俺は今までの未練をすべて押し込めて灼眼を使った。

ｓｉｄｅ　高城

そんな…炎雅が…

「先生！！どうして炎雅を置いてきたのよ！！」

アタシは怒りで我を忘れて先生に殴りかかろうとした。
だけどそんなアタシを毒島先輩が止めた。
「落ち着くのだ、高城くん」
「これが落ち着いてられるもんですか！！だって炎雅が…」
アタシはそれを思い出して膝をついてしまった。
どうして…どうして炎雅が死ななくちゃいけないの…。
どうして…。
「炎雅を信じようじゃないか。炎雅はきっと生きてる」
「そんないい加減な…ッ！？」
アタシは先輩の言葉に言い返そうとして先輩を見た。
そんな先輩の目には涙が浮かんでいた。
そうか、先輩も…
アタシは先輩のように炎雅を信じてみようと思う。
炎雅はきっと生きてる。
ｓｉｄｅ　？？？

まったく、君はいつでもむちゃくちゃだね。

まっ、それが君の良いところだろうね。

そんな君が死んでしまうのは実に惜しいね。

僕の‘右眼’と似ている‘左眼’を持っている君はね…。

僕はそう思い静かに炎上の中に歩いていった…。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

つづく…

力を過信するのは禁物だぞ　ｂｙ冴子（後書き）

炎雅を失った小室一行…

一体彼らはどのような行動に出るのか…

また、現れた謎の人物は敵か味方か…

感想待ってます…

見たことない天井だ……　ｂｙ炎雅（前書き）

久しぶりの更新です！

ではどうぞ！

見たことない天井だ……　ｂｙ炎雅

ｓｉｄｅ　炎雅

俺は死んだのか…。

いや、死んだにしてはなんだかリアル感があるな…。

ピクッ

どうやら手が動くことから俺は死んではいないようだな。

あんだけ灼眼を使ったのに死んでねぇとはな。

俺もつくづく運がいいみてぇだな。

「うっ…ぅ……」

俺は目を開け体を動かそうとするが俺の意志に反して体はあまり動かない。

しかも俺の左眼はかなりの激痛が走ってやがる。

スタスタスタスタ…

そんな俺の耳が誰かが近づいてくる音をとらえた。

一体誰が来たんだ。

そう思った俺は右眼だけを開き音がしたほうを見る。
開いた俺の右眼が捉えたのはどこかは分からないがどこかの家の壁。
そして一人の女の顔だった。
しかもその女と言うのが俺の知り合いだったから驚いた…いや、警戒したんだ。
「やぁ、お目覚めかい？日比野炎雅君？」
「三嶋…真夜……」
この女は三嶋真夜と言い唯一俺が喧嘩で黒星をつけられた相手だ。
まぁ、灼眼は使ってなかったけどな。
「どうしたんだい、そんな表情で僕を見たりして。もしかして惚れたのかい？」
バカなこと言うな。誰がてめぇなんかに惚れるかよ。
「お前が俺を助けたのか」
「あぁ、そうだよ？君の周りには〈奴ら〉の灰が散らばっててその中心に君が倒れてたんだ。まぁ、別にほっといてもよかったんだけど気まぐれで助けさせてもらったよ」
ちっ、最悪だ。こんな奴に借りを作る羽目になるとはな。

「ここはどこだ」

「まったく礼もなしにいきなり質問かい？少しは礼儀を覚えたらどうだい？」

ちっ、いちいちうるせぇ女だ。

だからこいつとは関わりたくねぇんだ。

「助けてくれたことには感謝してるよ。で、ここはどこなんだ」

「ここは僕の家だよ。だけど安心しなよ、親はもう帰ってこないと思うから」

「……」

だからこいつは嫌いなんだ。

人が死んだとしてもなんとも思っていないような態度。

それに人を小馬鹿にするような態度がな。

「ふぅ。君はもう少し感情を押し殺した方がいいよ。顔に僕が気に食わないって書いてあるよ？」

「書いてるわけねぇだろ」

「だったら君は僕のことが好きなのかい？」

「……」

こいつといるととことん調子が狂わされる。

「ふふふ、君は本当にからかいやすいね。話してて飽きないよ」

「そうかよ。俺はイライラするけどな」

「それは嬉しいな。僕は君がイライラするように言葉を選んでいるからね」

ちっ、とことんムカつくヤロォだ。

こんな奴に助けられたかと思うとヘドが出る。

まっ、助けてくれたこと自体は感謝してるがな。

「ふむ、ところで日比野炎雅、お腹は空いてないかい？」

「あぁ？腹なんか『ぐぅぅぅぅ…』……」

「ふふふ、君のお腹は君より素直みたいだね」

……

くそっ、タイミングの悪ぃ腹だ。

「ちょっと待ってなよ。今、ご飯を持ってくるよ」

「いらねぇよ。お前が作ったもんなんか」

「それはいくら僕でも傷つくなぁ。まぁ、君は素直に聞かないことくらいは分かってるさ」

なんだその、お前のことならなんでも知ってるよ発言は。

いつから俺とお前はそんな関係になったんだ。

「女の子の手料理くらい食べてくれてもいいんじゃないかな？」

「俺はお前を女だと思ったことは一度もねぇ」

「ふふふ、それは残念。大人しく待ってなよ？今仕度するからさ」

三嶋はそう言うと居間から出て行き台所に行った。

ようやくうるせぇ奴が消えたか。

にしても灼眼を使いすぎるとホントに死にかけるんだな。

今回はなんとか〈奴ら〉を消し炭にしたあと三嶋が助けてくれたから助かったものの次もうまく助かると言う保証はない。

こんどからは時と場合を考えてつかわねぇとな。

「つーかいつの間にか着替えられてっし」

そう、左眼の痛みになれてきた俺がようやく周りをみれるほどの余裕を取り戻してから分かったんだがいつの間にか俺の服装は制服からなんだか三嶋には似合わないようなメルヘンチックなパジャマになっていた。

この家には俺と三嶋以外いない。

つまり三嶋が俺を着替えさせたことになる。

まぁ、だからってどうと言うことはねぇんだがな。

今ごろあいつらはどこで何してんだか……。

ｓｉｄｅ　高城

炎雅がいなくなってからいろんな事があったわ。

せっかく炎雅が助けた奴が小室に喧嘩を売ってそれを宮本が倒したり、紫藤がリーダーをかってでありそれを聞いた宮本がバスを降りたりそれを見た小室が同じようにバスを降りたり……。

ホント自分勝手な人たちだわ。

そんなとこに〈奴ら〉が乗ったバスが突っ込んできたし…。

もう、どうすればいいのよ…。

助けてよ、炎雅…。

ｓｉｄｅ　炎雅

「さぁ、持ってきたよ日比野炎雅。これでも食べて元気を出してくれたまえ」

そう言って三嶋が持ってきた料理はみるからに俺に危険信号を送ってくるものだった。

明らかに混ぜるな危険的なものを混ぜ合わせたような料理だ。

こんなもん食ったら確実に下痢で死ぬ…。

「どうしたんだい、さぁ遠慮せずに食べなよ」

「いや、遠慮も何もこれ食えんのか？食えるならお前が食って確かめてくれ」

「男がグチグチ言うものじゃないよ」

三嶋はそう言うと俺の口に無理やり粗末な料理を押し込んできた。

吐き出そうにも三嶋が口を押さえてっから吐き出せねぇ。

仕方ねぇ、腹を決めるか…。

ゴクンッ…

……ん？マズくない。つーかむしろ痛みがとれてきてるんだが。

どうなってんだ…

「どうだい僕の料理は。我が家に代々伝わる伝統ある痛み取りの料理さ」

なるほどな、どうりで痛みがとれたわけだ。

だが、もう一口食べたいとは一生思わないだろうな。

「あぁ、痛みはとれたがもういらねぇ。吐き気がする」

「それは失礼だね。ただ単に見た目が悪いってだけて食べるのをやめて欲しくないな」

「うるせぇ。料理はまず見た目、味も大事だが見た目はもっと大事だ」

と、俺はグルメ研究家のように語るが本当はもう食いたくないだけだ。

「てか今思ったんだが『ドゴォォォォォォォォォォン』なんの音だ？」

俺が三嶋に質問しようとするとどこからか爆発音が聞こえてきた。

「結構近いね」

三嶋はそう言うとカーテンを開き外を見た。

だがそこで俺は驚きを隠せなかった。

何故なら俺がいた高校からかなりの距離が離れていたところにいたからだ。

どのくらいの時間が経ったかはわかんねぇがこんな距離をすぐに移動できるわけがねぇ。

「なぁ、三嶋。お前はどうやって俺をここに連れてきたんだ」
「どうやってだって？もちろん君のバイクを借りてに決まってるじゃないか」
「そうか」
にしたってそんな速く来れるわけがねぇ。
少なくとも一時間はかかるはずだ。
だが時間を確認してもそんなには経っていないようだ。
つまりかなりの時間寝ていたと思った俺の感覚はおかしいと言うことになる。
こいつと会ってから変なことばっかり起こりやがる…。
「ふむ、爆発したのはどうやらバスみたいだね」
どうして分かるんだと言いてぇがこいつは予知的な力を持ってるみてぇだからな。
おそらくそれであってんだろ。
「近くには〈奴ら〉と数人の生きてる人間がいるね。まぁ、うまく逃げたみたいだね」
生きてる人間…まさか小室や高城、先輩達じゃねぇのか。

そう思った俺は今着ている服を脱ぎ捨てさっきまで着ていた制服を着る。

「そんな体でどこに行く気なんだい、日比野炎雅」

「あぁ？決まってんだろ。あいつらに合流する。もしかしたら爆発が起こったとこにいるかもしんねぇからな」

「いなかったらどうするんだい？」

「そんときはそんときだ」

そう言って俺は家を出ようとしたのだがそこでいきなり三嶋が脱ぎ始めていた。

「な、ななななな何やってんだお前は！？」

「おや？僕を女としては見てないのじゃなかったのかい？」

くっ、こいつ…

「あぁ、そうだ」

言い負けるのもしゃくだからな。

つうか何やってんだこいつは。

「君は今僕が何をやってるんだと思ったね？教えてあげるよ。僕もついて行くから着替えをしてるのさ」

……

おいおいまさか俺のバイク乗っていくわけじゃねぇよな。

「よし、じゃあ行くよ日比野炎雅」

三嶋が準備できたようなので俺は二人で家を出た訳なのだが…

「お前はなにで行く気なんだ」

「もちろん君のバイクに乗せてもらうよ」

やっぱりか…

仕方なく俺は後ろに三嶋を乗せて爆発が起こった場所に向かった。

side out

つづく…

見たことない天井だ……　ｂｙ炎雅（後書き）

感想待ってます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4548n/

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD～灼眼の瞳に映る世界～

2010年10月9日23時37分発行